

## 環境保全のボランティア体験講座 2025 第7回講座レポート

第7回目の講座は 11 月 9 日(日)富田林市の滝谷不動明王寺付近にある、奥の谷で開催しました。

この日は風邪やインフルエンザが若い人の間で流行っているようで、直前にバタバタと休みの連絡が入り受講生は 9 名となりました。

集合時間となり、待合せ場所である近鉄「滝谷不動」駅前から徒歩で、活動地に向かいます。



駅から徒歩 10 分ほどで景色が変わってきます。  
右の写真で、車道脇の道を右に曲ると・・・



細い農道となり、里山の風景が広がってきました(写真下)。

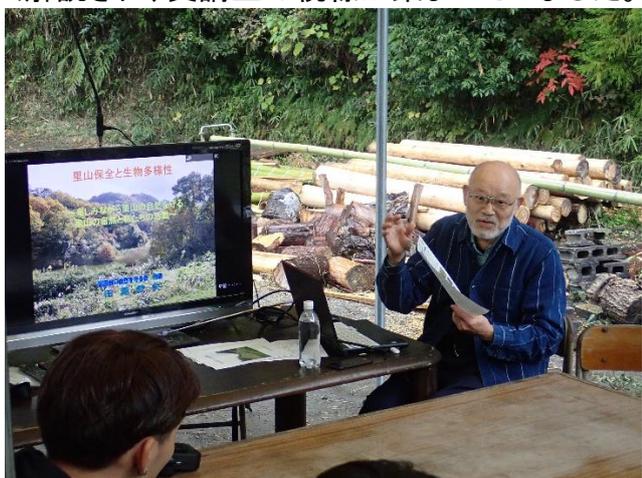
これまでの経路で皆さんが傘をさしている様子で分かる通り、残念ながら雨天開催となりました。



駅から 20 分ほどで今回お世話になる「富田林の自然を守る会」さんの活動拠点に到着しました。左下の写真の右端の方が、団体の代表をされておられます上角(じょうかく)さんです。右下の写真で、「どうも、大谷翔平です」と挨拶された左の方は端さん。スタッフを含めた皆さんの笑いを掴み、この時からアットホームな空気が流れていました。



まず、富田林の自然を守る会の相談役をされておられます田淵さんに、里山保全と生物多様性というタイトルでこの活動地についてのご紹介などを、スライドを使った座学にてお話いただきました。その中で「心がけていること」について挙げられた 11 項目や、「生物多様性保全・自然保護が当たり前の社会に」といったスライドでは、自然環境を保全していく上でかなり重要なことが分かりやすく解説され、受講生の視線が集まっていました。



続いて、柴山さんからは放置竹林問題についてのご講演です。

この活動地では、いくつかの班に分かれて活動がされており、炭焼班に所属されている柴山さんには、これから皆さんが学んでいただく「竹」について詳しくお話いただきました。

右の写真で左右に持っておられるのは 2 種類の竹です。



まず基本なお話として、「文献によって様々であるが、日本には約 600 種類の竹が生育している」という解説には、その多さに受講生は驚きの様子でした。

その中でも、マダケ(国内在来種)とモウソウチク(江戸時代に中国から渡来)について実際に手元で違いを見てもらうべく、実物が回されました。

節のところが2つの輪(凸凸)になっているのがマダケ、1つの輪(凸)になっているのがモウソウチクで、近くで目で見てもなかなか分からないのですが、指で触るとすぐに分かります。

モウソウチクの方が、タケノコはおいしいという話もありました。



また、「生長点はその節々にあるので、木よりも早く成長し、タケノコは1日で1m近く、地下茎は1年間で5m以上伸長することもある。」「次々とタケノコが生えることによって生息域を広げて竹林となるが、これらの竹はすべて遺伝子が同一のクローンであり、花が60~120年周期で咲いた後一斉に枯れる。前回枯れたタイミングでプラスチック製品が普及しだして、竹が使われなくなった。」といった解説などにも、受講生は耳を傾けていました。

よって、用途がなくなり管理されなくなった竹林はどんどん広がってしまい、そういった場所が日本全国にあることを受講生は学びました。

放置竹林問題を学んだところで、実際に竹林に移動します。  
トイレを案内してから、装備を揃えることとしましたが、左下の写真のように男性用のトイレは竹で作られた囲いの中に踏み台があり、敷いてある藁に向かって用を足すといった独特のスタイルです。自然の産物を使ったこの施設のスタイルに、受講生ははじめてな体験をしたのでした。右下の写真は準備のために機材を揃えたり、長靴に履き替えている様子です。



活動地に向け早速出発！  
下の写真のように林内を暫く歩くと、針葉樹林から竹林に風景が変わりました。



尾根の途中で竹林の話がされたのは、写真左下の右端におられる炭焼班の米田さんです。元々ここは竹林であったところを切り開いたので、竹を刈った跡(写真右下の赤矢印)が今でも残っていると話されました。



また暫く歩くと尾根が開け、景色のいいところ「みはらし台」に出ました。ここも、元々はうっそうと樹木が生えていましたが、整備されたことにより人々が爽快感を感じられる場所になったとのことのお話がありました。



その後、これから竹林の伐採を体験するため、実習地の竹林に来て受講生は説明を受けました。下の写真はその時の様子です。



皆さんの視線の先には、下の写真の光景が広がっていました。  
右の方に斜めの竹が一部写っているものの、全体的には綺麗に切断されて整備されているのが分かります。

早速、右奥の方に進み、竹の伐倒を体験します。



上の 3 枚の写真は、大きな竹を倒す時に手前の小さな竹が作業の邪魔になるので先に切断している様子です。

右の写真は、協力しあって倒れた竹を運びやすいように更に切断している様子です。



当初は雨が強かったので、このあたりの作業はデモンストレーションで炭焼班がお見せした後に誰か1~2名だけで切る予定でしたが、少し雨脚が弱くなったため、皆さんで体験することができました。

交代しながら、切断や運搬を繰り返し、チップパー近くまで運び出します。



下の写真は、運び出した竹をチップパー（粉砕機）にかけている様子です。一定のリズムで大きな音を出しながら竹を粉砕していくチップパーは、まるで竹を食べる怪獣です。

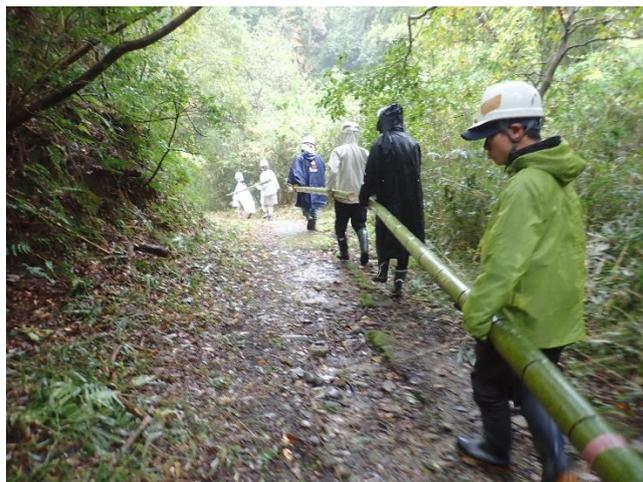


受講生も少しだけ体験してみました。チップパーに差し込んだこの直後、巻き込まれないように少し後ろに離れました。

竹の粉碎後の臭いを皆さんで嗅いでみました。  
えぐみのあるツンとした臭いがします。  
肥料としては窒素、リン酸はほとんどなく、乳酸菌による有機土壌改良剤になるようです。  
飼料としても際立った栄養価はないようですが、竹に多く含まれる食物繊維やビタミン E が作用するようです。



木でいう幹に当たる部分「稈(かん)」の太いものは粉碎しないで枝を落とし、拠点まで運搬しました。



今後、使うこともあるようで、端に寄せて積んでおきます。



ここまでを一旦午前中の活動とし、昼休憩に入りました。  
これまでの講座でなかなか一つの輪になって食事をする事も少なかったですが、これを機に記念  
写真を撮りました。



下の写真は、守る会の方が用意してくれて皆に振舞われたハーブティーと柿です。  
現地で採れたものを現地でいただくのも、こういった里山で活動する時の醍醐味です。



さて、休憩が終わり、次のアクティビティに移るために材料を運びます。  
竹の筒と細長く切った竹の棒。  
何に使うかはこれからのお楽しみです。



その材料も、一旦はここ「枇杷庵」という東屋に置いておくことに。  
なんとここには風情ある囲炉裏が設置されていました。



さて、そのすぐ傍にある炭焼窯の見学となりました。  
窯を覆う屋根の骨組みにも竹が使われているのが分かります。



こちらでは、米田さんによる竹炭の説明がありました。  
実物を手に取り、窯の内部も見学し、伐採後の竹の利用方法の一つを学びます。



写真右の炭は、松ぼっくりや栗を炭にしたもので、  
花炭と呼ばれるものです。  
受講生たちは初めて見る炭を興味深そうに観察  
していました(写真下)。



右の写真は、竹酢液の臭いを嗅いでいる様子です。

竹酢液は竹炭を作る際に出た液体を蒸留したもので、木酢液との違いは原料が違うだけで、基本的には同じような成分が含まれています。

焚き火の煙のような、いぶした臭いがかなり独特で、この匂いが虫除けや害獣よけになると言われており、当活動地ではイノシシ除けに使われているようです。

ただ、効果は数日であり、頻繁に撒かないといけないとご苦労を口にしておられました。



さて、ここからは枇杷庵付近と炭焼窯付近の二手に分かれて竹炭用に竹を割っていくことに。

馬と呼ばれる台座に竹を置き、皆で協力しながら炭窯のサイズに合わせた長さで切っていました。下の写真は、安全面を考慮した作業時の立ち位置をお聞きしている様子です。

カケヤと呼ばれるハンマーの先に、人がいては飛んでくる可能性があり危ないので、押さえる人は90度横にズれて作業をしてくださいとの米田さんの説明がありました。

その後、カケヤで十字の筋のついた鉄棒(写真下の赤矢印)に向かって竹を打ち込みます。



今度はその鉄棒を持ち上げ、刺さったままの竹を逆さにして鉄棒が上に来るようにします(写真左の赤矢印)。

あとは途中まで割れている竹の一番端の部分を持って鉄棒ごと持ち上げ、下に打ち付けた時の重さによる衝撃で竹を4分割にしていきます。

ここまで米田さんの説明があり、ここからは実際に受講生が自分でやってみます。

ローテーションで全員が作業できるように回しました。



綺麗に四つに割れていっているのが分かりますね！

こちらは節落としの様子です。  
ナタを使って作業します。



左の写真のように、割った竹の中の節を落とすことで、窯に挿入時に無駄な隙間をなくして焼却時の効率をあげることができます。

作業が終わり、割った竹は右の写真のように  
備蓄場所に積み上げました。





枇杷庵側のグループも同様の作業を繰り返します。  
ただし、割る時は2人でやっていた作業を1人でこなすという方法  
に違いがありました。  
どっちがやりやすかったのかな～？



こちらで割った竹は炭焼窯の横の備蓄スペースに移動させます。  
左の写真はその時の運搬の様子です。

次は枇杷庵に全員が集まり、昼食後に運んできた竹の棒を使って「孫の手」を作ります！  
 ここからは奥村さん(写真右の一番左の方)に教えていただきました。  
 まずはナイフを使っての作業となります。  
 竹の縁のささくれの除去と、火の熱でこれから曲げる部分を平坦にする作業を行いました。  
 なかなかナイフを使う機会も少ないためか、皆さん苦労されていたイメージです。



ある程度削れたら曲げる部分を決め、ひたすらそこ(赤矢印)を燃えない程度に温めていきます。



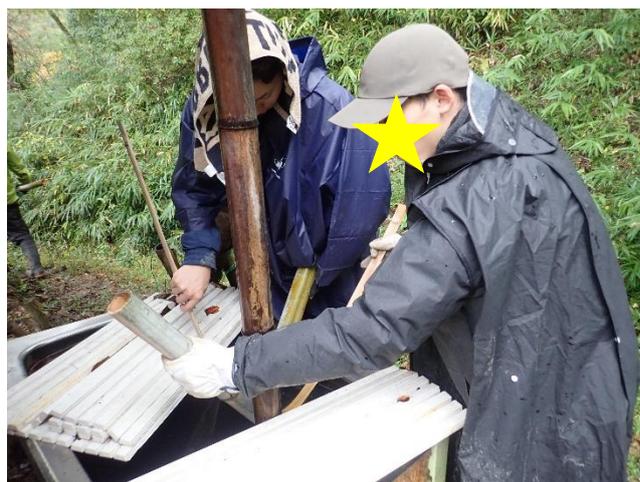
温まったら、竹でできた専用の工具で一気に曲げていきます(写真右下)。



曲がったらそのまま竹筒に差し込んで固定し、建物裏にある貯水槽で冷やします。



左の写真は作業時の全体の様子です。囲炉裏を取り囲んでの講座は貴重な体験だったと思います。



最後に要らない長さの部分は切断、材質が少し堅かったのですが孫の手の先に切れ込みを入れようと頑張る受講生もいました。  
これでいよいよ完成です！



その後、使った道具や外に運び出していた長椅子などを戻して片づけをして終了としました。



右上の写真で受講生の指に止まる昆虫はベニカミキリ。  
体長約 15 mmの小型のカミキリムシで、真っ赤な体  
が特徴です。  
主に竹林に生息し、幼虫は竹を利用します。  
ベニカミキリは一般的に見かけることが少ないた  
め、珍しいカミキリムシとされています。



最後はアンケート記入前に、お世話になった活動地の方々も入って貰って、自身で作った「孫の手」  
を手に全員で記念撮影！いい思い出になりました。



活動が終わり、アンケートの記入と感想の共有を行いました。  
中には自ら手を挙げて発表するなど、熱心な受講生もいました。



右下の写真は、最後に上角さんから受講生に向けて一言いただいている様子です。



このあと、お世話になった方々にお礼を言って、もと来た道を駅まで歩き、駅で解散しました。

さて、アンケートでは、以下のような回答が寄せられました。

・四季でとれる植物を活用した体験、時間ごとに見られる生き物の視察会が自然環境だからこそできることだと思いました。自然好きだけではなく、あまり自然に慣れていない人といった幅広い人を対象に保全活動をなされていることに感心しました。地域の人たちといった自然だけではなく、周りの人たちとの関わりを大切にすることが保全する人が増えることにもつながるのかなと思いました。

・田淵さんが講演でもおっしゃられていたように、単に自身の思い浮かべた理想を単に夢としてとどめておくのではなく、その理想をどのような機会を通して実現させていくかプランをできるだけ明確に示すことが環境保全を他の人達と協力して行うために大切だと理解しました。また、竹を切って環境保全対策を行うのにも、決してそれは自分だけではなく様々な人達と信頼を築いていく上で協働して取り組むものなのだと改めて思いました。

・「まちづくり」を研究している私にとって、市民団体の自然環境(里地里山)の保全活動は最も興味のあることでした。特に地主さんとの関係についてのお話が面白かったです。始めは自然環境の調査で知り合っただけのお話も伺うことができましたが、志を共にするメンバーが集って、その結果、素張らしい活動が行われ、自然環境の保全に繋がるのがとても良いものだなと感じました。

・放置竹林の現状や里山全体を保全しようとする活動について詳しく学べて、これから自分が活動に参加する時は、地域の人々や行政の機関とのつながりを意識して自然環境を管理することも街づくりの一環として考えていきたいと思いました。(←科学的に立証されていなくても保全を大切にしたいです！)雨の中、ありがとうございました！

・竹林はやっかいなものだと思っていたが、適切に管理・利用すれば環境に優しい材料になると考えが改まった。自分の大学に森林関係のグループはあるが、竹林に着目したコンテンツはあまりないので、来年度の活動の一つの案として提案しようと思います。

・最初の田端さん？の講義がとても学びがあって面白かった。・質疑応答の時間が多くとられていたのが良かった。・雨の中でも、体験できることを最大限させていただいて、とても良い経験になった。竹細工もとても楽しかった。・活動地の皆様が全員とても気さくな方々で、話していてとても楽しかった。

・指導者の方たちがとてもユーモアがあって楽しかった。体を使って身をもって体験できて竹林を手入れすることの大切さや、竹林が自然に与えている影響がよくわかった。アットホームな雰囲気でのびのび楽しくできました。

以上のように、竹林の利用・管理の川上から川下までを、実体験で学べて、皆さんに満足していただけた講座となりました。

また、作業的な内容だけではなく、保全を進めるにあたっては人と人との繋がりも大事であって、そのことをユーモア溢れるアットホームなこの活動地で感じさせてくれる機会となりました。

第7回の講座は雨天にもかかわらず、ほぼ予定通りのスケジュールで進めることができました。ご協力いただきました活動地の皆さま、ありがとうございました。